

三 保証としての靈

コリントの信徒への手紙 二 五章一節—十節

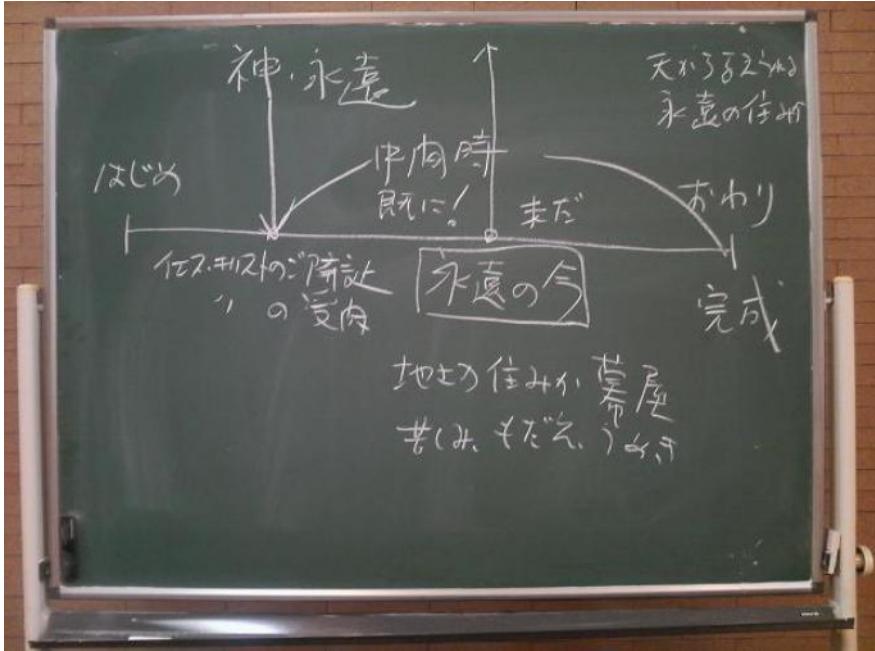
一〇〇八年九月二一日礼拝説教 秋吉隆雄 牧師

教会の暦で今日の主の日に読むように定められている聖書は、コリントの信徒への手紙 二 五章一節から十節までです。このコリント書はパウロがコリント教会に宛てて書いた手紙であります。聖書の言葉は読んですぐに分かる言葉もあります。それは慰められる、励まされる力ある言葉としてわたしたちの心の中に響いてきます。けれども、反対に何を書いているのかなかなか分からぬ言葉も沢山あります。それはまず時代が違います。また民族が違います。そして宗教的な事を書いてありますから、分からない、理解できないことが沢山あるのは当たり前と考えられます。例えば、夏目漱石は沢山の小説を書いています。夏目漱石は今から百年位前の小説家です。けれども、夏目漱石でさえも今日わたしたちはなかなか読みにくいのではないでしようか。生活環境が違い、ものの考え方や違うわけですから、すんなりと入ってはこないところがあるでしょう。特に若い人には、あれほど自我に悩んだ小説家の思いというのはなかなか理解しにくい面があるだろうと思います。紫式部の源氏物語は有名でありますけれども、源氏物語は今からちようど千年位前に書かれた小説です。原文を読むためには相当勉強しないといと読めないと思います。現代訳した源氏物語であってもあの時代の背景が分からぬと理解できないところが沢山あるわけです。同じ日本人が書いたものですけれども分からぬわけです。パウロは紀元後五十年代、今から千九百五十年前、約二千年前の人間です。二千年前でありますから、ものの考え方や、生活や文化、これはもう全く違うわけです。しかもパウロは日本人ではなくてユダヤ人であります。更に彼は宗教的真理について彼が経験したこととを書いているわけです。このパウロが書いたものを今日のわたしたちが読んですと胸に入るというのは、なかなか大変だろうということは容易に想像することが出来ます。

今日与えられました御言葉、コリントの信徒への手紙 二 五章一節から十節まで、この部分は本当に難解で、読んで頭の中に入ることとはまずないだろうと思います。けれども、ここに書かれている事はキリスト教信仰にとって大切なことだと私は思っています。そこで解りやすくするために、まず図解で説明したいと思います。これはパウロの言葉を理解するための基礎的な背景にあ

たる事柄であると思うからです。

聖書は創世記の最初に、「初めに、神は天地を創造された」という言葉から出発しています。初めに神さまは天と地とその中に住む全てのものを造られた。「初め」があるということは、必ず「終り」があるということを意味します。初めがあるから終りがある。聖書の歴史観は、循環する歴史観ではなくて、初めから終りに向かって直線的に進む時間論です。終りは神による完成です。聖書の時間論はこのように神さまが初めに天地を創造して、終り・「完成」までを全責任を持つて導かれる歴史です。これがわたしたちに与えられている歴史です。この歴史の中で時満ちて、神さまはひとり子イエス・キリストを遣わされました。それは、「永遠の神」が時間の中に交わったということです。この交わった時点が、イエス・キリストのご降誕、または神学的には「受肉」ということです。時間の中に永遠の神がぶつかった。このことを通して神さまは歴史の中・時間の中にわたしたちと一緒にいてくださるという奇跡が起こった、歴史の中に神が直接関わる救いが成就したという出来事、これがイエス・キリストの「御降誕」、クリスマスです。



現在のわたしたちは何処にいるかというと、ここ「現代」です。この時点は「永遠の今」という言葉で表現されます。わたしたちは神の子イエス・キリストを感じているわけです。ということは永遠と結び合っているということです。永遠と結び合っているわたしたちに救いの確かさが与えられているのです。

イエス・キリストの御降誕から、歴史が終わる・完成する終末の時間までの時間帯を「中間時」という言葉で神学的には表現しています。中間時はどのような時なのか、これはイエス・キリスト・永遠の神が時間の中に突入し、わたしたちと関わって下さったことによって、わたしたちはすでに救われている、「既に救われている」という時です。何故ならば、わたしたちの生は空しく流される生ではなくて、イエス・キリストによる信仰によって神に根拠を置く確かな生として捉えられるから、わたしたちは既に救われていると言えるわけです。けれども、皆さんがご承知のように、わたしたちの生きている生活は全き救いではないわけです。ですから、「未だ救いが完成していない」。「救いが完成する」のは終りの完成時です。永遠の今を生きているわたしたちは中間時に生きているわけです。これは、既に救われている、しかし、未だ全き救いではない。「未だ」と「既に」との緊張関係の中にわたしたちの生というものがある。これが中間時にあるわたしたちのあり方です。これが基本的にキリスト教の捉えている時間に対する考え方なのです。

パウロは、今日の御言葉の中で、わたしたちの今生きている所は「地上の住みか・幕屋」と言っています。幕屋はテントです。イスラエルの民が出エジプトした時にテントを張つて、たたんで、また張つて、たたんで移動したわけです。幕屋はユダヤ人にとっては地上に住んでいることの証の言葉です。これに対向するものが「天から与えられる永遠の住みか」という言葉です。これは歴史の終り、終末の時に全きかたちとして与えられる神さまからの祝福の救いです。パウロは、わたしたちは地上の住みか・幕屋にある。しかし、わたしたちは最終的には天から与えられる永遠の住みかを望んで生きていると言っています。そして、パウロは、今日の御言葉で、地上の住みか・幕屋に住んでいるわたしたちは、苦しみがあり、もだえがあり、うめきがあると言っています。ここでパウロは、地上の住みか・幕屋の中に住んでいるわたしたちは、苦しみ、もだえ、うめいているけれども、そのわたしたちは天から与えられる永遠の住みかがすっぽり上から被せられる、着せられると言っているのです。そういう事柄が本当に起ころうのだと、わたしたちは知

つてゐる、望んでゐる。これは「既に」と「未だ」との緊張関係の中で「中間時」を捉えているパウロの言葉として理解されるわけです。

皆さん、今日与えられましたコリントの信徒への手紙 二 五章一節から五節までをご覧いただきたいと思います。今申し上げた事柄を頭に置いて読んで頂きたいと思います。「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によつて建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願つて、この地上の幕屋にあつて苦しみもだえています。それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。この幕屋に住むわたしたちは重荷を負つてうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまつたために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださつたのは、神です。神は、その保証として“靈”を与えてくださつたのです。

今まで申し上げましたように、地上の幕屋の上に天から与えられる永遠の住みかを着ると言うのです。そのような救いを与えられるにふさわしい者としてわたしたちは神さまから備えられている。そしてこの出来事の保証として聖靈がわたしたち与えられているのだと言つてゐるわけです。保証というのは、手付金という意味です。大きな買い物をする場合には全額は払わないで、手付金を払うというわけです。払うことによつて全部のものを買ったことの確認をするわけです。パウロは、「天から与えられる永遠の住みか、これはまだ全てはもらつていない」と言うわけです。けれども、聖靈という保証によつて手付金としてこのことが保証されているのだ。そのような聖靈がわたしたちに与えられている。だからわたしたちは地上の幕屋にあるけれども、安心なのだ。これが、パウロが宣べ伝えようとしていることです。

今日の聖書のちよつと前、コリントの信徒への手紙 二 四章の十六節から十八節をご覧いただきたいと思います。ここには、パウロの有名な言葉ですが、こう書いています。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い難難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永

遠に存続するからです。」

外なる人・地上の住みか・幕屋、これは衰えてゆくのです。けれども、内なる人、イエス・キリストに結び合つた、永遠と結び合つてゐる信仰において神に向かつてわたしたちは日々新たにされていく。ですから、わたしたちが地上の幕屋で負つてゐる艱難は、これは一時のものであつて、天から与えられる住みかを着るときの栄光に比べると何ほどのものでもないと言つてゐるわけです。わたしたちは見えるものではなく、見えないもの、神に目を注いで生きる。見えるもの・地上のものはすべて過ぎ去るけれども、見えないもの・永遠に向かつたわたしたちの視点は神にあつて確かなものとされていくと言つてゐます。ですから、わたしたちは地上にあるわけですけれども、歴史の終りの完成を望んで、そこで支えられている栄光を信じて今を生きていく。そのような信仰を聖靈がわたしたちに保証しているのだとパウロは言つています。勿論、このような滅び去る者が栄光の命を与えられる、その出来事がどうしたら起ころのかというと、言うまでもなくイエス・キリストの十字架と復活の出来事であります。イエス・キリストは地上における幕屋で苦しみ、もだえて、そして十字架にかかるて亡くなられました。亡くなつて死んで終つたかというと、そうではなかつた。そうではなくて神がこのイエス・キリストを死の中からよみがえらせて神のあざやかな命を与えたわけです。わたしたちはこのイエス・キリストの十字架と復活を信じる。この信仰を根拠にするときに、地上の住みか・幕屋は苦しみ、もだえ、うめく、そのような生であるけれども、必ずやイエス・キリストが永遠の命に与つたように、天から与えられる永遠の住みかをわたしたちはすっぽり着ることができる。そのことの保証として聖靈を神さまが与えてくださつてゐる。これを信じる。これが、パウロが宣べ伝えようとしている信仰です。

後半の五章六節から十節までをご覧頂きたいと思います。「それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています目に見えるものによらず、信仰によつて歩んでいるからです。わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行つたことに応じて、報いを受けねばならないからです。」

パウロは目が悪かったのですね。ですから、彼自身が文字を書くことがほとんどありませんでした。パウロが口述するわけです。口述したものを見渡すと、論理的に事柄を書けるわけですけれども、口述した場合には物事がぼんぼんと飛んでゆくわけです。そういう響きがこの箇所にはじみ出ていると思います。ここでパウロは、「わたしたちは心強い」と二回も言っています。何故心強いのか。それは、保証としての靈が与えられているから、わたしたちは神のものとされている。だから、わたしたちは心強いと言っているのです。このときパウロの心は揺れています。どういうところが揺れているかと言うと、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。体を住みかとしている、肉体を持つて時間の中に生きているその時には、不信仰になつてキリストから離れる、この不信仰は分かつていています。これは当たり前です。わたしたちは四六時中、神やキリストのことを考えて生きているわけではありません。色々なことを考えて生きているわけです。ですから、体を持つて生きる限り、信仰深いということはあり得ないわけです。みんな不信仰なわけですよ。神さまから離れてくるのです。そのことをパウロは知っているというのです。だからこそパウロはこうも言っています。「体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。」体を離れて、ひゅっと永遠に向かつて飛び上がつたらそこにキリストがおられるわけですから、その方がいいと言つているのです。肉を持つて生きる限り主から離れる、だから、肉を離れてキリストと共にいたい。これがわたしの願いだと言つてゐるわけです。この問題は来週の主日礼拝で、フイリピ書からもう一度学びたいと思います。パウロの本音はそうだということを言つています。この考え方は当時のギリシャ・ローマ世界で通用する思想であつたと思います。ギリシャ・ローマで語られた当時の思想信仰というものは、肉のものはくだらないというわけです。だから、肉から離れて天にある靈的な世界・魂の世界が崇高な世界である。それをあこがれる。こういうことを当時の人々は真剣に考えたわけです。パウロも今読んだところではそういうことを言つてゐるわけです。「体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます」と。ところが、これから先がパウロの他と違うところです。それは九節からです。「だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。なぜなら、

わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行つたことに応じて、報いを受けねばならないからです。」

パウロは地上の生の意味を語るわけです。神さまは天上の世界だけではない。地上の世界も見ておられる。だから、地上の世界でわたしたちがどのように生きたか、それを神さまが見ておられる。あなたがどのように苦しんで、もだえて、うめいてきたか、そのうめき、苦しみ、それさえも神さまは見ておられるのだから、そのうめきも神さまの前で最終的にははつきりと裁かれるのですと言つているわけです。ということは、地上のこの生そのものも神さまの前にひとえに意味があるということを言つているわけです。これが当時の思想とパウロの思想と全く違うところです。パウロは信仰義認、信じた者はそれで救われるということを中心には伝道した使徒でありました。けれども、「信じて救われる」と、彼が語つたのはただその抽象的な救いだけではないのです。救われた人間はこの歴史に対して、時代の中でどのように生きるか、そのことも神さまの前に明らかにされていくと言つてはいるわけです。ですから、私は今日の御言葉は大変インパクトがあると思います。わたしたちの信仰は永遠の世界を望むわけです。上からすっぽりと栄光の体に変えられるわけです。それを望んで生きているわけです。しかし、地上にあつてはやはり苦しみ、もだえ、うめきながら生きて行くわけですけれども、その苦しみ、もだえ、うめきこそが神さまにしつかりと見られているというのです。だからその生をしつかり生きなさいというのです。これがパウロのわたしたちへの勧めの言葉です。体をもつて生きている限りは、わたしたちは全き救いといふものはないわけで、辛いことが沢山あるわけです。けれども、辛くてもいいのです。わたしたちは栄光の体に必ず変えられる。それは、イエス・キリストの十字架と復活のゆえにそのような体に変えられるわけです。それを信じている。だから、今の与えられている生活に対して誠実に神さまの前に生きる。これがわたしたちの信仰のあり方です。聖靈がそのような生き方をわたしたちに保証してください。これが何よりの喜びです。これをしつかりと受けとめて、一緒に信仰生活を励んでいきたいと思います。